

知的障害者本人参加を重視した青年学級の より豊かな実践を求めて

- T市「みんなの青年の会」における13年間の活動内容の検討 -

高畑 庄蔵

(北海道教育大学札幌校)

要 旨：本研究では、筆者が設立当初から指導者・ボランティアとして関わった13年間活動を継続しているT市「みんなの青年の会」について、1990年度から1993年度を第1期(開設期)、1994年度から1997年度を第2期(充実期)、1998年度から2002年度を第3期(発展期)の三期に分け、具体的な活動内容及び経過、学級生のコメント等を分析し、その在り方を明らかにすることを目的とした。卒業生が養護学校卒業後も充実した生活を送るためには、どのような活動内容を準備・展開すべきかが、知的障害者本人の主体的で能動的な活動内容が青年学級の活動を考慮する上で重要な観点であることが推測された。知的障害者本人たちのニーズをトータルに捉えて、地域での主体的な活動につながるようなサポート体制づくりはどうあるべきかという課題にも踏み込んで考察を加えた。

Key Words：知的障害者，青年学級，本人参加，生涯教育

．はじめに

知的障害者の青年学級は、知的障害者のアフター・ケアの場として、かつ卒業生が仲間と一緒に余暇を楽しく有意義に過ごし、社会生活をする上で必要な知識、技能、態度を身につけていく生涯教育の場として(大野・宮本・井田, 1989)円滑な社会参加・自立を図る意味で重要な役割を担って展開されてきた。なかでも東京都等では養護学校義務化以前から先進的な取り組みが行われてきた。例えば、星野(2002)によると、墨田区では、1964年に中学校特殊学級の同窓会「巢美多会」が母体になって社会教育課が主管の青年学級「すみだ教室」が発足した。活動内容は、年間19回にわたり調理実習、クラブ活動、レクリエーション等であった。

さらに近年、こうした卒業後の適切な教育環境の整備は、生涯教育の観点からも非常に重要なこととされ、青年学級の一層の充実が望まれる(宮本・大野・井田, 1990)。しかし青年学級の実態は明らかではなく、全国でおおよそ500

学級あると予測され(大南, 2000)、現在、全国における実態調査が進められている段階にしかないとしている(大南, 2001; 2002)。

このような青年学級の活動内容に関する数少ない先行研究として、大野・宮本・井田(1989)は、出席者の少ない月の特徴としては、疲労感が残り、職業生活に影響を残す活動、見る、聞く、話し合う等の静的な活動、受動的な活動は敬遠されがちになる点。出席者の多い月の特徴としては、主体的、能動的に取り組める活動がプログラムの中心となる点を報告している。これらの指摘からは、卒業生が養護学校卒業後も充実した生活を送るためには、どのような活動内容を準備・展開すべきかの検討が重要に思われる。さらに、知的障害者本人の主体的で能動的な活動内容が青年学級の活動を考慮する上で重要な観点であることが推測できる。また本人たちのニーズをトータルに捉えて、地域での主体的な活動につながるようなサポート体制づくりも大切な点となると考えられる。

本研究では、筆者が設立当初から指導者・ボ

ランティアとして関わった 13 年間活動を継続している T 市「みんなの青年の会」の活動内容及び経過を分析し、その在り方を明らかにすることを目的とする。

・方法

1. 対象会

T 市「手をつなぐ育成会」が主催する青年学級（1996 年度より「みんなの青年の会」と改称）を対象とした。1990 年の設立当初は、18 歳から 30 歳代の知的障害者 30 名ほどが参加した。

2. 期間

1990 年 4 月から 2003 年 3 月までの 13 年間を対象期間とし、開設直後の第 1 期（開設期）、クラブ活動の開始やハワイ旅行が実施され活動が充実した第 2 期（充実期）、さらに知的障害者本人による定例役員会の活動が発展してきた第 3 期（発展期）の三期に区分した。

3. 分析方法

1990 年度から 2002 年度までの月例定例会案内、年間 4 回発行の「T 市育成会ミニ通信」、活動 10 周年記念誌「未来 - 二十一世紀へ - みんなの青年の会 10 周年記念誌」（T 市手をつなぐ育成会, 2000）及び年間計画や各回の実施記録の記載や本人のコメント、筆者とのやりとりを含めた具体的なエピソード記録から関連事項を抜粋し検討を加えた。また、大南(2000)の示すカテゴリーに従って、13 年間の継時的変化を第 1 期（開設期）、第 2 期（充実期）、第 3 期（発展期）の三期に分けて活動内容を分類し、検討を加えた。

・結果及び考察

1. 第 1 期（開設期）:

1990 年度から 1993 年度

1) 会全体の経過概要

養護学校卒業後の生活充実と社会参加を目的として、1990 年 3 月 17 日に青年学級開催打合せ会を行い、「T 市手をつなぐ育成会」が主体となって T 市「青年学級」が開催されることとなった。

第 1 期では、学級生たちの休日における余暇活動の充実を目指した。それまでは、家庭を中心とした余暇活動が主であり、学級生同士が集って様々な社会的資源の活用や余暇活動への参加が不十分な状況にあった。年間活動内容は保護者と筆者が中心となって協議がなされ、Table 1 に示すような内容が計画・実施された。開講日は月例定例会として日曜日開催とし、会場は学習会、クリスマス会等の室内行事は T 市社会福祉センターが利用された。その他の行事については、地域のレクリエーション施設等の社会資源が利用された。参加者は 10 名程度から 30 名程度であった。

2) 学級生の取り組みの概要

全ての行事において、ボランティアが指導者となり実行された。全体進行、準備等の当日活動の全てがボランティアと保護者で準備された。このような中、1990、1991 年度の学習会で筆者が講師となり学習会「ゴミの話」を実施した。1991 年 8 月 25 日に行った学習会「ゴミの話：空き缶は生きている！」を Table 2 に示した。「空き缶はまだ生きています。生き埋めにされてはかわいそうではありませんか。」等、

Table 1 第 1 期（開設期）の活動内容

年月日	活 動 内 容	年月日	活 動 内 容
1990 年度		1992 年度	
3月17日	青年学級開催打ち合わせ会	4月19日	青年学級開講式
4月22日	青年学級開講式	5月31日	ハイキング（立山山麓）
5月27日	ワープロ、ソフトボール	6月20日	ハイ物学習（絵画教室）
7月15日	社会見学（新穂高）	7月14日	学習会（科学文化センター）
8月26日	学習会、藤工芸	8月28日	学習会
9月16日	ワープロ、ボランティア活動	9月27日	ボランティア活動、サッカー
10月14日	フェナー祭参加	10月10日	運動会前夜祭に参加
11月18日	年賀状作り、ソフトボール	10月31日	一泊研修旅行
12月9日	ケーキ作り、クリスマス会	11月1日	（能登）マンス会
1月27日	学習会、ちぎり絵	12月23日	クリスマス大会
2月17日	スキー会、開講式	1月23日	チャレラン大会
3月17日	青年学級開講式	2月20日	スキー会
1991 年度		3月13日	青年学級開講式
4月21日	青年学級開講式	1993 年度	
5月12日	古洞の森ハイキング	4月18日	青年学級開講式
6月16日	買物学習	5月30日	ハイキング（頼成の森）
7月14日	乗馬教室、ソフトボール	6月20日	ハイ物学習（絵画鑑賞）
8月25日	学習会	7月14日	学習会（科学文化センター）
9月8日	社会見学（交通管制センター）	8月28日	一泊研修旅行
ソフトボール		29日	（白山、里野）
10月6日	ソフトボール	9月19日	りんご狩り（飛騨古川）
11月23日	一泊研修旅行	10月24日	ボランティア活動、サッカー
24日	（信州半礼村）	11月14日	社会見学（火力発電所）
12月15日	クリスマス会	12月19日	クリスマス会
1月26日	工作教室	1月23日	学習会
2月16日	スキー会	2月20日	スキー会
3月15日	青年学級開講式	3月13日	青年学級開講式

Table 2 学習会「ゴミの話」の概要（1991年8月25日）

指導内容	指導者(筆者)の活動	学級生の活動
導入 ビデオ視聴	アルミ缶提示し、三択クイズをする 空き缶リサイクルに関するビデオを提示する。	名前カードを思った所に貼る ビデオを見る。
空き缶の リサイクル	空き缶は生きているという話をする みんなの力で、多くの空き缶を生き返らせる ことができることを伝える	空き缶のほとんどがリサイクル 可能なことを知る
新聞紙等の リサイクル まとめ	新聞紙や雑誌も生き返らせることができる ことを伝える 今後、空き缶等をどうするかを問う三択 クイズをする	廃品回収の意味と役割を知る リサイクルできるように空き缶 箱に入れることの大切さを知る

知的障害者にわかりやすく、ビデオやクイズでリサイクル問題についての学習会が行われた。2時間にわたる学習会であったが、学級生たちは最後まで真剣に参加し、特に学級長のAさん（知的障害男性：20代後半）は、身近なゴミの話に大変興味を持ち、「ゴミはまだ生きている。かわいそうだ。ぼくたちでゴミを助けよう。」等と、他の学級生たちに呼びかけた。Aさんは、筆者が提示用に持参したカラー写真で構成された本を自費で購入し、自宅で自らゴミの勉強を始めた。そのことをAさんの保護者から聞かされたとき、筆者は障害者の生涯学習の必要性を強く感じた。こうしたAさんの意見に賛同する学級生も現れ、2ヵ年連続（2回）の学習会となった。保護者たちも賛同し、社会見学としてゴミ処理場の見学も実施された。そして1992年度からの年間計画に「ボランティア活動」として空き缶・ゴミ拾いが導入され、1992年度に1回、1993年度に1回、更に、1994年度からのボランティアクラブへと発展して行った。この学習会は学級生の主体的な活動を引き出す大きな契機となった。こうした一つの学習会がきっかけとなり、継続的なボランティア活動に発展したことについて、保護者から以下の感想が寄せられた（T市手をつなぐ育成会、2000）。

保護者（女性50代）「ぼくたちも空き缶ひろい等ボランティアをしたい！と始まったボランティア活動。ボランティア活動の日の朝10時頃になると、市社会福祉センターのロビーに参加者が口々におはようございますと言いながらぞくぞくと集まってきます。大勢の人波を横目で見ながら、彼らは誇らしげに空き缶拾いや清掃に取り組んでいます。（中略）この活動を始めてからは彼ら自身の自負にほかありませんが、一緒に参加されてくださるボランティアさんの協力を忘れてはなりません。また、年数回みんなの青年の会で空き缶拾いやごみひろい等を行う予定ですが、その他、彼らに楽しくできるボランティア活動に何かあるか、彼らと目下模索中です！」

2. 第2期（充実期）:

1994年度から1997年度

1) 会全体の経過概要

第2期では、学級生たちのニーズを反映する活動を支援することを目指した。将来的に学級生たちが自主的、主体的に活動できることを目指すことを意図した。会の名称変更や学級生による役員会の発足を想定し、各活動における内容を簡略化し、学級生が主体的に取り組めるモデルとなるように配慮した。そのために、第1期から第2期の95年度までは、年間活動内容について保護者と筆者が中心となり協議し、Table 3に示したように計画・実施された。

開講日は第1期と同様に、日曜日ごとの月例定例会とされ、会場は室内行事はT市社会福祉センターを利用した。その他の行事については、T市体育館やボウリング場等の地域の社会資源を積極的に活用した。参加者は30名程度から多いときには70名を越えた。このように、学級生の参加数の増加を受けて、ボランティアの確保が問題となった。そのため、筆者が発起人となり、養護学校教員、学生、社会人によるボランティアサークル「共楽共育サークルT」を設立した。

また、第1期で述べたように保護者と一部の学級生の中で空き缶拾いや清掃に関するボランティア活動への関心が高まり、1994年度からは町の清掃活動を行うボランティアクラブが発足した。そして、1994年度と1997年度には、「希望の旅」としてハワイ旅行が実施された。その様子は地元新聞記事にも次のように掲載された。「太平洋を越えてTとハワイの知恵遅れの青年が交流。T市手をつなぐ育成会青年学級は、ハワイを訪れ、同じ障害を持つ青年と交流を深める。これまでにハワイの気候や時差等を学び、ハワイの仲間たちへのプレゼントも手作りし、六日の出発日を心待ちにしている。（一部抜粋）」（北日本新聞朝刊、1994年12月5日）

Table 3 第2期(充実期)の活動内容

年月日	活動内容	年月日	活動内容
1994年度	ボランティアクラブ発足	1996年度	「みんなの青年の会」に改称
4月3日	開講式	4月7日	ボランティアクラブ
4月10日	ボランティアクラブ	4月21日	開講式、バーベキュー大会
5月1日	ボランティアクラブ	5月12日	ボランティアクラブ
5月14日	一泊研修旅行	5月26日	社会見学(ビール工場等)
6月5日	ボランティアクラブ	6月2日	ボランティアクラブ
6月26日	買物学習	6月23日	買物学習(金沢方面)
7月10日	ボランティアクラブ	7月7日	ボランティアクラブ
7月31日	ボランティアクラブ	7月21日	スポーツ、学習会
8月7日	ボランティアクラブ	8月4日	ボランティアクラブ
8月13日	施設交流会(ボウリング大会)	8月17日	施設帰省者交流会
9月4日	ボランティアクラブ	9月1日	ボランティアクラブ
9月23日	東海北陸ブロック大会	9月22日	一泊研修旅行
10月2日	ボランティアクラブ	23日	(五箇山)
10月30日	バーベキュー大会	10月13日	ボランティア活動、体力測定
11月13日	ボランティアクラブ	10月20日	あざみ園祭参加
11月20日	学習会、スポーツ、ボランティア	11月3日	ボランティアクラブ
12月4日	ボランティアクラブ	11月24日	料理教室
12月6日	希望の旅	12月1日	ボランティアクラブ
12月10日	ハワイ五日間の旅	12月22日	クリスマス会
12月25日	クリスマス会	1月5日	ボランティアクラブ
1月8日	ボランティアクラブ	1月14日	新成人を祝う会
1月22日	学習会、絵画教室	2月9日	ボランティアクラブ
2月5日	ボランティアクラブ	2月18日	スキー会
2月19日	スキー会	3月2日	ボランティアクラブ
3月5日	ボランティアクラブ	3月15日	ボウリング大会、閉講式
3月12日	ボウリング大会、閉講式	1997年度	
1995年度		4月6日	ボランティアクラブ
4月2日	ボランティアクラブ	4月27日	開講式、バーベキュー大会
4月9日	開校式、花見	5月4日	ボランティアクラブ
5月7日	ボランティアクラブ	5月11日	社会見学(黒部みどりの森)
5月28日	バーベキュー大会	6月1日	ボランティアクラブ
6月4日	ボランティアクラブ	6月15日	買物学習(高岡方面)
6月18日	本人部会への参加	7月6日	ボランティアクラブ
7月2日	ボランティアクラブ	7月13日	スポーツ、学習会
7月16日	絵画教室	8月3日	ボランティアクラブ
8月6日	ボランティアクラブ	8月16日	施設帰省者交流会
8月17日	施設帰省者交流会	9月7日	ボランティアクラブ
9月3日	ボランティアクラブ	9月14日	一泊研修旅行
9月23日	一泊研修旅行	15日	(新潟雪だるま温泉)
24日	一泊研修旅行	10月5日	ボランティアクラブ
(乗鞍高原)		10月12日	体力測定、ボランティア活動
10月15日	体力測定、ボランティア活動	10月26日	セーナー苑祭参加
10月29日	セーナー苑祭参加	11月3日	ボランティアクラブ
11月5日	ボランティアクラブ	11月16日	料理教室
11月26日	料理教室	11月30日	ボランティアクラブ
12月10日	クリスマス会	12月2日	第二回希望の旅
1月7日	ボランティアクラブ	6日	(ハワイ方面)
1月21日	新成人を祝う会	12月21日	クリスマス会
2月4日	ボランティアクラブ	1月4日	ボランティアクラブ
2月18日	スキー会	1月11日	新成人祝賀会、音楽、ダンス
3月3日	ボランティアクラブ	2月8日	ボランティアクラブ
3月17日	ボウリング大会、閉講式	2月15日	スキー会
		3月21日	ボウリング大会、閉講式

印は、月例定例会以外に実施する有志によるクラブ活動である。

Table 4 1996年度第3回役員会の流れ(1996年10月9日)

時間	行事等	検討内容
出席者：学級長及び役員5名、保護者5名、ボランティア4名		
午後7:00	夕食会	
7:30	学級長の挨拶	・今日の話し合いの流れを説明
行事内容と運営に関する検討		
7:40	10月行事	・集合時間と場所の確認
	体力づくり、測定	・トレーニングセンターへの移動の仕方
		・グループ分けの仕方
		・挨拶や集合係の分担
	11月行事	・料理教室のグループ分けの仕方
	料理教室	・作ってみたい料理の意見発表
		・進行役の決定
	12月行事	・司会進行、サンタクロース役の決定
	クリスマス会	・やってみたいゲームの検討
		・招待する団体の検討(ダンスチームに決定)
8:30	学級長の挨拶	・次回、役員会の日程確認

さらに1996年度から「みんなの青年の会」への名称変更も行われた。この名称は、大南(2000)が指摘するような学級生の高齢化による名称変更ではなく、「もっとかっこいい名前を自分たちでつけたい。」という学級生たちの希望からであった。こうした会の名称に会わせて学級生本人が役員として参加する定例役員

会も発足し、Table4のように3ヶ月に1回の割合で1時間30分程度の時間が設けられ、学級生の代表が活動内容について企画段階から参画できるようになった。このような取り組みの中で、これまでの活動に加えて、本人たちの希望から施設帰省者との交流会、施設祭への参加等の交流活動も積極的に行うようになった。

Table 5 新成人祝賀会 (1998年1月11日)

時間	活動内容	Dさんの活動	筆者及びボランティアの援助
午前 10:00	福祉センターに集合		・司会者役に進行用カードを準備 (背後に立って援助をする)
10:10	学級長の挨拶 育成会会長の挨拶 新成人入場 記念品贈呈 新成人代表の言葉	学級長の紹介 育成会会長の紹介 入場のアナウンス アナウンス 新成人代表の紹介 学級生への新年の抱負のインタビュー	(背後に立って援助をする)
10:40	ラブバンドの演奏	ラブバンドの紹介	
11:30	祝賀会食		
午後 12:30	カラオケスタジオに移動 カラオケスタジオ着	カラオケを楽しむ	・グループ分けの援助 ・機械操作の援助 ・一緒にカラオケを楽しむ ・人数確認 ・2月定例会のパンフレットの配布
3:30	終了 解散		

2) 学級生の取り組みの概要

この青年学級が開始されて約5年を経過する中で、学級生にとってみんなの青年の会は、とても大きな楽しみの会になってきた。この時期の学級生の感想として以下のものが残されている(T市手をつなぐ育成会, 2000)。

Bさん(男性)「みんなの青年の会やボランティアが大好きです。たのしかったことは、育成会でふねにのってほっかいどうへいったことです。家でトイレそうじをするとおかあさんによるこばれます。」

Cさん(女性)「わたしは青年の会がだいすきです。たくさんのもだちにあえるからです。1ヶ月に二かいあります。一つはかいものがくしゅう、りょうりきょうしつ、すぼ一つきょうしつ、いろんなことをします。もう一つはぼらんでいあです。はじめ四つのトイレそうじ。いまは三つです。おわたたあとはいいきもちです。それからしょくじにいて、おわたたらぼーりんぐにいたりします。はじめはとってもたいへんでした。いまはすたらいくもでます。たのしいです。」

また、一部の行事において、学級生が司会等を務める形で運営に参加するようになった。Table 5に1998年1月11日に実施された「新成人祝賀会」の概要を示した。Dさん(ダウン症女性:20代前半)は、初めて全体進行を務めることとなった。そこで、筆者はカード式による司会用シナリオカードを作成した。Dさんは、会が始まるまで筆者が用意したシナリオカードを何度も読み直して練習していた。フォーマルな会であり、Dさんの背後には、筆者が支援のためについたが、普段から発音が不明瞭なこともあってDさんの保護者はとても心配そうであった。しかし、Dさんは筆者の支援を受けることなく最後まで一人で大きな声で全体進行を務め上げ、全員から大きな拍手をもらった。Dさんも保護者も感激していた。保護者は、「何でもチャレンジさせてみるものですね。本

人にとっても私にとっても大きな自信となりました。」と感想を述べていた。

3. 第3期(発展期):

1998年度から2002年度

1) 会全体の経過概要

第3期では、学級生たちのニーズを反映するとともに、自主的、主体的に活動できることへの支援を目指した。第2期までの活動において、大筋の流れは学級生たちは学習していた。司会役はどのように活動を進行し、また注意すべき諸点についてもほぼ学習・習得しているものと考えられた。そのために、年間活動内容は定例役員会にて協議し、保護者やボランティアは、学級生たちのニーズを最大限実現するようにし、直接的援助は最小限に努めた。加えて、各活動毎に担当者を学級生から選出し、自主的な活動になるよう配慮した。

この協議の中で学級生の代表から「学習会や話し合いは年に1回程度引き続き学習会を開きたい」、「年2回ぐらいは全員で運動したい」、「趣味・習い事は人それぞれ趣味が違うのでやらなくてよい」、「レクリエーションと見学・旅行、調理はもっと多くしてほしい」、「空き缶ひろい等のボランティア活動はボランティアクラブ以外でも全員でやる機会がほしい」等の意見が出された。このような学級生の代表の意見を反映してTable 6のような活動が計画・実施された。開講日はこれまでと同様、日曜日の月例定例会とされ、室内行事の会場はT市社会福祉センターを利用した。その他の行事については、T市体育館などの地域の社会資源を一層活用した。参加者は第2期と同様に30数名から多いときには70名を越えるようになった。参加数の増加を受けて、ボランティアの一層の確保が問題となったが容易ではなかった。そこで、役員たちのリーダーシップがますます求められるようになった。

Table 6 第3期(発展期)の活動内容

年月日	活動内容	年月日	活動内容
1998年度	料理クラブ発足	9月3日	ボランティア、スポーツクラブ
4月5日	ボランティアクラブ	9月23日	研修旅行
4月19日	開講式、バーベキュー大会	24日	ボランティア、スポーツクラブ
5月3日	ボランティアクラブ	10月9日	歩行会、体力測定
5月17日	料理クラブ	10月28日	きらりんピック
5月31日	社会見学(飛騨古川)	29日	ボランティア活動
6月7日	ボランティアクラブ	11月5日	ボランティア、スポーツクラブ
6月21日	買物学習(富山市街地)	11月19日	ボランティア、スポーツクラブ
7月5日	ボランティアクラブ	11月26日	料理教室
7月19日	パソコン教室(富山大学)	12月3日	料理クラブ
8月2日	ボランティアクラブ	12月17日	クリスマス会
8月16日	施設婦省者交流会	1月7日	ボランティア、スポーツクラブ
8月30日	料理クラブ	1月14日	新成人祝賀会
9月6日	ボランティアクラブ	2月4日	ボランティア、スポーツクラブ
9月20日	ボランティア活動、体力測定	2月18日	スキー会
10月4日	ボランティアクラブ	3月4日	料理クラブ
10月24日	一泊研修旅行	3月18日	ボウリング大会、閉講式
25日	(ひるがの温泉)	2001年度	
11月1日	ボランティアクラブ	4月8日	
11月22日	料理教室	4月22日	開講式、バーベキュー大会
11月29日	料理クラブ	5月6日	料理クラブ
12月6日	ボランティアクラブ	5月26日	一泊研修旅行
12月20日	クリスマス会、カラオケ等	27日	ボランティア、スポーツクラブ
1月10日	ボランティアクラブ	6月3日	ボランティア、スポーツクラブ
1月17日	新成人祝賀会、ラブバンド	6月17日	学習会、カラオケ
2月7日	ボランティアクラブ	7月8日	ボランティア、スポーツクラブ
2月14日	スキー会	7月22日	社会見学
3月7日	ボランティアクラブ	8月7日	料理クラブ
3月14日	ボウリング大会、閉講式	8月12日	施設婦省者交流会
3月28日	料理クラブ	9月2日	ボランティア、スポーツクラブ
1999年度		9月9日	買物学習
4月4日	ボランティアクラブ	10月7日	ボランティア、スポーツクラブ
4月25日	開講式、バーベキュー大会	10月14日	歩行会、体力測定
5月2日	ボランティアクラブ	11月4日	ボランティア、スポーツクラブ
5月16日	社会見学(高岡方面)	11月18日	料理教室
5月30日	料理クラブ	12月2日	料理クラブ
6月6日	ボランティアクラブ	12月16日	クリスマス会
6月20日	買物学習(高岡方面)	1月6日	ボランティア、スポーツクラブ
7月4日	ボランティアクラブ	1月13日	新成人祝賀会
7月18日	スポーツ、ボランティア活動	2月3日	料理クラブ
8月1日	ボランティアクラブ	2月17日	スキー会
8月15日	施設婦省者交流会(華山温泉)	3月3日	ボランティア、スポーツクラブ
8月29日	料理クラブ	3月17日	ボウリング大会、閉講式
9月5日	ボランティアクラブ	2002年度	
9月18日	一泊研修旅行		ボランティアクラブが
19日	(信州白馬)		スポーツクラブに変更される
10月3日	ボランティアクラブ	4月7日	スポーツクラブ
10月17日	歩行会、体力測定	4月21日	開講式、バーベキュー大会
10月24日	セーナー苑祭参加	5月12日	料理クラブ
11月7日	ボランティアクラブ	5月12日	スポーツクラブ
11月21日	料理教室	5月19日	社会見学
11月28日	料理クラブ	6月2日	スポーツクラブ
12月12日	クリスマス会	6月16日	学習会、カラオケ、ボランティア
1月16日	新成人祝賀会、ラブバンド	8月4日	料理クラブ
2月6日	ボランティアクラブ	8月4日	スポーツクラブ
2月20日	スキー会	8月12日	施設婦省者交流会
3月5日	ボランティアクラブ	9月1日	スポーツクラブ
3月19日	ボウリング大会、閉講式	9月7日	一泊研修旅行
3月26日	料理クラブ	8日	料理クラブ
2000年度	ボランティアクラブに	10月6日	スポーツクラブ
	スポーツ活動が加わる	10月13日	歩行会、体力測定
4月16日	料理クラブ	11月10日	スポーツクラブ
4月23日	開講式、バーベキュー大会	11月17日	料理教室
5月7日		12月1日	料理クラブ
5月28日	社会見学	12月1日	スポーツクラブ
6月4日	ボランティア、スポーツクラブ	12月15日	クリスマス会
6月18日	買物学習	1月5日	スポーツクラブ
7月9日	ボランティア、スポーツクラブ	1月19日	新春カラオケ大会
7月16日	スポーツ	2月2日	料理クラブ
8月6日	料理クラブ	2月2日	スポーツクラブ
8月16日	施設婦省者交流会	2月16日	スキー会
		3月2日	スポーツクラブ
		3月16日	ボウリング大会、閉講式

印は、月例定例会以外に実施する有志によるクラブ活動である。

また、保護者と一部の学級生の中で、将来的な自立を目指す目的と余暇活動を兼ねた料理活動への関心が高まり、1998年度から料理クラブが発足した。そしてボランティアクラブと同日して実施していた水泳を中心としたスポーツクラブを2002年度から発足した。さらに学習会では、地域の人材を積極的に活用した。例えば、2002年6月16日に開催された学習会では、「健康の話」として知的障害者に理解の

ある整形外科医を講師として招聘し、身体の疲れや怪我の予防についての講義を受けた。

さらに、1998年度からは年度最後の会で役員から次年度の年間計画案が提示され、例えば買物学習の場合、どこに行きたいか等について学級生のみんなで話し合いがなされるようにしていった。

Table 7 新春カラオケ大会の流れ (2003年1月19日)

時間	活動内容	Eさんの活動	筆者及びボランティアの援助
午前 10:00	福祉センターに集合	人数確認、役員に協力依頼	
10:10	学級長の挨拶	学級長の紹介 学級生への新年の抱負のインタビュー	
10:30	みんなで踊ろう	率先して踊る 音楽係	
11:30	祝賀会食		
午後 12:30	カラオケスタジオに移動	グループ分け (役員はリーダーになる)	グループ分けの援助
	カラオケスタジオ着	カラオケを楽しむ	機械操作の援助 一緒にカラオケを楽しむ
3:30	終了 解散	人数確認 2月定例会のパンフレットの配布	

2) 学級生の取り組みの概要

ほとんどの行事において、ボランティアの支援は最小限に留め、役員が司会やまとめ役を務める形で運営に参加するようになった。Table 7に2003年1月に開催された「新春カラオケ大会」の概要を示した。このカラオケ大会は、「新成人祝賀会」に代わって新しく企画された行事であった。企画の中心となった役員のエさん(知的障害男性:20代前半)は、開始の30分前に会場に着き、役員たちと役割分担の確認をしていた。「困ったときには助けてください。」と筆者にお願いする場面も見られるくらい緊張していた。実は、筆者はDさんの時と同様に、カード式による司会用シナリオカードを作成していた。しかし、Eさんは、会の前日、筆者の自宅に「心配です。できるでしょうか。」と電話してきていた。筆者は、「大丈夫だよ。司会用のシナリオカードを10回読んで練習してごらん。きつとうまくいくから。」とアドバイスした。グループ分けについても、「先生がいつもやっているように、生まれた月別に並んでもらえばいいんだよ。そうすれば、みんなきつとすぐに並んでくれるよ。」ともアドバイスした。心配していたカラオケのグループ分け、司会は順調に進み、無事終了した。Eさんには、役員や保護者、ボランティアからねぎらいの声がかかり、本人も満足げであった。その日、Eさんから筆者の自宅に電話があった。「ばく、できました。とてもうれしかった。先生、また今度やる時、教えてください。」と次の活動への参画を意図する内容の発言であった。次年度のカラオケ大会の司会役も、Eさんが自ら立候補した。

また、次年度の年間計画を検討する中で、以下のような意見が学級生から出されるようになった(T市手をつなぐ育成会, 2000)。

Fさん(女性;20代)「来年の行事の希望: みんなといっしょにステーションデパートへ行って、マリエに行って、CICへ行っている

んなものをたくさん買って、たくさん集めて、たくさん遊んで楽しみたい。また、みんなといっしょにカラオケに行って、新しい曲、古い曲、デュエット曲等いっぱい歌って踊って、いやなことをはっさんしてパツともりあがってスッキリして、楽しみたい。」

Gさん(男性;30代)「いっぱく旅行が好きです。料理と買物学習も好きです。またいっぱく旅行に行きたいです。」

Hさん(男性;20代)「6月15日はみんなの青年の会でTサティに買物学習に行きました。レコード店でCDアルバムとアイドル写真を2枚買いました。それからみんなでプリクラをしました。(中略)とても楽しい一日でよい経験をしました。これからいろいろな人たちと会って話もしたいし、ボウリングもしたいし、たくさんの行事にも進んで参加し、自分のためになるようにしていきたいです。」

13年間活動を継続しているT市「みんなの青年の会」の活動内容及び経過を概括したが、Table 1、3、6に示した月例定例会活動の活動日数を内容ごとに分類したものがFig. 1である。この分類は大南(2000)によるもので、教養講座・話し合い等、体育・スポーツ等、趣味・習いごと等、レクリエーション、見学・旅行等、調理・食事作法等の6つのカテゴリーからなっている。ただし、このカテゴリーにない分類として、「ボランティア活動等」を追加設定した。なお、「」印は、学級生たちのニーズを反映した活動を示し、「」印は、学級生たちのニーズを反映し、かつ企画・活動に加わった活動を示した。

第1期は保護者と筆者によって活動内容が検討されていたが、年度によって内容の占める割合が変化している。このことは、開始当初のため、その内容設定の困難さをしめしているものと思われる。ちなみに、各期毎の1年間における月例定例会の割合について見てみる。

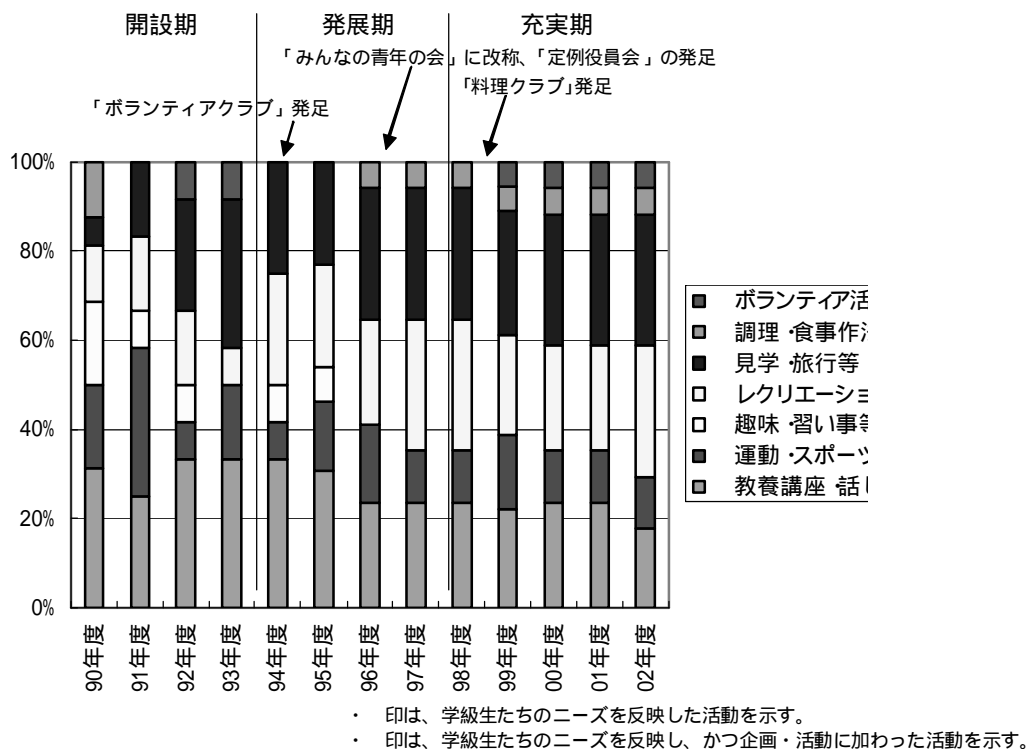


Fig. 1 対象会の活動内容別の変化

第1期では計52活動が行われており、その平均は、教養講座30.7%(4.0回)、見学20.3%(2.5回)、スポーツ19.3%(2.5回)、レクリエーション13.5%(1.8回)、習いごと8.9%(1.3回)、調理3.1%(0.5回)、ボランティア4.2%(0.5回)であった。第2期では計48活動が行われており、その平均は教養講座27.8%(4.0回)、見学26.7%(4.0回)、レクリエーション25.3%(3.8回)、スポーツ19.3%(2.5回)、習いごと4.0%(0.5回)、調理2.9%(0.5回)、ボランティア0.0回(0.0%)であった。96年度から学級生たちから選ばれた役員による定例会が発足し、本人たちのニーズを反映した活動内容となった。第3期では計67活動が行われており、その平均は見学29.1%(5.0回)、レクリエーション25.6%(4.4回)、教養講座22.1%(3.8回)、スポーツ12.7%(2.2回)、調理5.8%(1.0回)、ボランティア4.6%(0.8回)、習いごと0.0%(0.0回)であった。98年度からは、学級生たちのニーズを反映し、かつ企画・活動に加わった活動内容となった。Fig. 1に示したとおり、第3期では、第1期、2期に比べて学級生のニーズを反映した活動内容となり、からまでの割合も年度を通して安定した形となった。なお、クラブ活動について

は、ボランティアクラブが第2期で年平均11.3回、第3期で4.0回実施された。料理クラブは第3期で年平均4.0回実施された。スポーツクラブは第3期で年平均5.4回実施された。

このように13年間の取り組みの中で月例定例会の活動内容は変化していったが、第1期は大南(2000)が示す6つのカテゴリーがバランスよく配置されていた。第1期の計画は全て保護者とボランティアによるものであり、「青年学級」という名称のごとく生涯学習の場である教養講座・話し合い、趣味・習い事等が多く配置されていた。このことは、高橋(1997)が指摘する障害のある青年たちの青年期教育の保障に関しては、学校教育における後期中等教育の完全保障およびその拡充が課題であるが、同時に学校卒業後の社会教育における学習活動の保障が切実なものとなっているという主張を反映したものであると思われる。しかしながら、定例役員会の発足した第2期以降は、学級生のニーズが活動内容に反映され始め、レクリエーションや見学・旅行等が多く選択されるようになった。なお、この結果は大野・宮本・井田(1989)が指摘する主体的、能動的に取り組める活動がプログラムが多く選択されている結果とも一致するものと考えられる。また、第3期

の1999年度から活動内容がほとんど同じ割合になっているが、1998年度頃から協力してくれるボランティアの毎回の確保が困難となり、学級生自らが司会・運営等、活動に参画する必要に迫られてきた。定例役員会で前年度の計画を踏襲しながら、本人たちだけで実行可能な計画づくりを支援した。1999年度にはボランティア活動を役員の見地で加えることとなった。このことは、学級生たちが実行しやすいような運営形態に活動内容が定型化されたのではないかと考える。

加えて、学級生のフラストレーション解消の場として本会が機能していることも考えられる。Cさん、Fさん、HさんやGさんが述べているように、仲間たちと集うことは普段の会社の人間関係を忘れ、楽しむことができる大切な機会となっていることが推測される。杉山(2002)は、発達障害のある人にとって大きなストレスになるのが、職場の人間関係であると指摘している。仲間と集い余暇を楽しむことが、杉山の言う「会う楽しみ」となり、適切なストレス対処法となっているものと予想され重要な指摘であると思われる。

このようにT市「みんなの青年の会」設立当初は、ほとんど全てにおいて保護者とボランティアが企画立案し、その指導のもとに活動を行う形態となっていたが、1996年度から定例役員会を中心として役割分担等を行い、学級生たちが主体的に進行・運営ができるよう支援し続けてきた。また、本人たちによる主体的なボランティア活動の定例化も重要な取り組みであった。ボランティアクラブは1994年度から始まっているが、定例役員会において全員で空き缶拾い等のボランティアをするべきとの意見が役員から出された。そして、1999年度からボランティア活動が定例会として1回実施されることとなった。このことは、学級生たちが主体的に地域に貢献していこうとする姿勢を示すものであり、高く評価されるべきことであると考えられる。

最後に、知的障害者の本人活動の発展とボランティア確保の課題である。大南(2001; 2002)が指摘しているように、どこの青年学級でもボランティアの確保は大きな課題となっている。本会も同様の傾向であり、特に学生ボランティアは定着率が低い。また、学級生の高齢化を考えると親の会が中心になって支えていくには限界があるだろう(松矢・倉田, 1991)。今後は、学級生たちがお互いにピアサポートし合いな

がら学級を運営していくスタイルも、自主的主体的な本人活動として必要かつ重要な運営の在り方だと考える。

しかしながら、全てを学級生だけで運営するのは困難と考えられる。会場の確保や福祉バスの手配、案内状の作成(Fig. 2参照)と配布等、主な活動内容を取り巻く周辺的な活動の存在があり、そこでは支援者の支援を必要としていた。学級生の自主的、主体的な取り組みを実現するには、やはり細部で支援者がすべき周辺の活動と、学級生が主役となって自主的、主体的に活動できるような主活動を峻別し、必要な場合のみ支援者が的確に支援していく必要がある。今後、学級生が自主的、主体的に活動するための支援の在り方について、さらに検討していくことが求められよう。

会員の皆様へ

平成14年11月17日
T市 手をつなぐ育成会
みんなの青年の会

みんなの青年の会 12月の行事
クリスマス会のお知らせ

秋も深まりゆきり寒くなりました。皆さんは風邪もどひがず元気か
がんばっていらっひることをひまね。
さて、お楽しみ時のクリスマス会の告知させていただきます。今年もケーキ作
りをはじめ、「ハートパニック」の方々の演奏を聞いたり、ボランティア
びんと一緒にゲームをひまねして、今年最後の行事を楽しみまひよう!

●日 時 平成14年12月15日(日)午前10時～午後3時まで

午前中は、ケーキ作り、バンド演奏の後は楽しい昼食タイム
午後からは、ゲームやプレゼント交換をして過ごします。

●実施場所 T市 総合社会福祉センター3階 大ホール


●参加費 2,000円(プレゼント代、昼食代、ケーキ材料代)
※プレゼントはこちらで用意します。エプロンを持参(ケーキ作りに必要)

◎参加希望の方は T市 育成会 9へ
11月30日までに申し込んで下さい。

料理クラブのご案内

日時 12月1日(日)

クラブ員は午前10時までに
サンフォルテに集合して下さい。



スポーツクラブのご案内

日 時 12月8日(日)午後1:00

集合場所 T市 福祉プラザ

持 ち 物 水着、水泳帽、タオル

B5版で保護者が作成。定例会終了後に配布し、欠席者には郵送する。

Fig.2 定例会案内のパンフレット

文献

- 1) 星野常夫(2002)特殊学級の整備・拡充と教育実践.全日本特別支援教育支援連盟編著, 教育実践でつづる知的障害教育方法史, 83-105.
- 2) 北日本新聞朝刊(1994年12月5日)ハワイの仲間と交流 青年らあす出発 .
- 3) 松矢勝宏・倉田淳子(1991) 一次調査から見た精神薄弱者の社会教育の実態 現場のための精薄教育, 日本精薄教育研究会, 33, 2, 12-21
- 4) 宮本文雄・大野由三・井田範美(1990) 特殊学級・養護学校卒業生(精神遅滞)のアフター・ケアに関する研究 東京都の青年学級の実態の分析を通して . 心身障害学研究, 14(2), 91-99.
- 5) 大南英明(2000) 青年学級. 小出進(編) 発達障害指導辞典, 学研, 403-405.
- 6) 大南英明(2001) 知的障害者の生涯学習を考える(その1) 東京都、静岡県、石川県、京都市の例 . 帝京大学文学部紀要, 26, 105-136.
- 7) 大南英明(2002) 知的障害者の生涯学習を考える(その2) 北海道、札幌市、群馬県等の例 . 帝京大学文学部紀要, 27, 23-56.
- 8) 大野由三・宮本文雄・井田範美(1989) 養護学校卒業生(精神遅滞)のアフター・ケアに関する研究 青年学級出席状況の分析を通して . 心身障害学研究, 13(2), 167-176.
- 9) 杉山雅彦(2002) 対人関係の障害とその援助. 今野義孝・藤原義博編著, 発達臨床心理学, コレール社, 197-201.
- 10) 高橋正教(1997) 障害者青年学級. 茂木俊彦(編) 障害児教育大事典, 旬報社, 507-508.
- 11) T市手をつなぐ育成会(2000)「未来 二十一世紀へ みんなの青年の会 10周年記念誌」